

聖書:列王記第二 3章1～12節

説教:主の預言者はいないのか

はじめに

イスラエルが北と南の二つの国に分裂すると、それぞれの王を立てて別々の道を歩み始めたのが紀元前931年と言われます。二つに分かれるくらい仲は良くないのですが、共通の敵が現れると、ときには同盟を結んで一緒に戦うこともありました。週報のアウトラインに載せた地図をみると死海の東側にモアブという国が見えます。そのモアブがあるとき、北イスラエルに背いたことから今日の話が始まります。当時北イスラエルの王であったヨラムは南ユダの王ヨシャファテに遣いを送り、同盟を結んで一緒にモアブと戦ってくれるよう依頼します。地図を見て分かるように、モアブは死海をはさんで南ユダのすぐ隣にあります。モアブがいま北に背いたということは、将来南ユダ王国にも敵対してくることは当然予想される。共通の敵が現れたことで、北と南は同盟を結んだ。そういう話です。さて、記憶力の良い人はどこかで同じような話しを聞いた気がすると感じたかも知れません。実は同じようなことが、すぐ前の列王記第一の22章に出てくる。単なる偶然でしょうか。それとも何か深い意味があるということでしょうか。二つの出来事をくらべながら神のみこころを考えていきます。

1 列王記第一22章

1) アハブとヨシャファテが同盟を結ぶ

それです。列王記第一22章を簡単に振り返ってみます。このときは、北イスラエルとアラムに戦いがあって膠着状態になっていました。そこで北イスラエルの王であったアハブが南王国のヨシャファテと一緒に戦って欲しいと願った。そうするとヨシャファテはこう答えた。22章4節後半。「私とあなたは一つ、私の民とあなたの民は一つ、私の馬とあなたの馬は一つです。」

そうやって同盟が成立し、これから戦いに出ようというとき、にせ預言者が集まってきて、王の心を付度して機嫌を取るようなことばかり言うのを見たヨシャファテは、しびれを切らすようにしてこう言う。「ここには、われわれがみこころを求めることのできる主の預言者が、ほかにいないのですか。」

2) 預言者ミカヤを信じなかったアハブ

それで呼ばれてきたのがミカヤという預言者でした。彼は他のにせ預言者から脅かされてもひるまず、アハブに「あなたは無事に戻ることができない」と告げます。つまりこの戦いでアハブは死ぬのだと告げたのですが、アハブはこれを信じないで戦いに出て、ミカヤのことばのとおり敵が放った矢も打たれて倒れた。これが列王記第一22章の出来事です。

すでにお気づきでしょうが、ヨシャファテが今日のところで、まったく同じフレーズを語っています。7節。「私とあなたは一つ、私の民とあなたの民は一つ、私の馬とあなたの馬は一つです。」そして11節。「ここには、主のみこころを求めることのできる主の預言者はいないのですか。」

最初に同盟を結んだときと、今日の箇所のできる主の預言者はいないのですか。」

2 人の知恵と主の知恵

1) 「エドムの荒野の道を」

では今日の箇所に移って、詳しく見ていきましょう。いま見たとおりに、北王国のヨラムとヨシャファテが同盟を結ぶと、次に問題となるのは具体的な作戦です。8節でヨシャファテは尋ねます。

「『どの道を上って行きましょうか。』するとヨラムは、『エドムの荒野の道を』と答えた。」

地図を見るとわかりますが、死海の南に位置するエドムが今回一緒に戦ってくれることになった。ならば少々遠回りになるけれど、安全なエドムを迂回して南側からモアブを攻める。そんな作戦です。ところが死海の端をぐるっと回って行くのですから、どうしても時間がかかる。移動に手間取っている間に水がなくなってしまう。目の前には死海が見えるけれど、塩辛くて飲めない。実際に現地に行ってみると分かりますが、死海の周辺では限られた場所しか真水は手に入りません。とうとう七日目に水がなくなり、今モアブが襲って来たら部隊は全滅してしまうという状態になります。そのときヨラムはこう言って嘆きます。10節。「ああ、主がこの三人の王を呼び集めたのは、モアブの手に渡すためだったのだ。」

ヨラムが嘆きたくなる気持ちは分からないでもないですが、よく考えてみてください。ヨラムは、

「主がこの三人を集めたのは」と言って、すべての責任は主にあるような口ぶりですが、そもそも同盟関係を結ぼうと言いだしたのはヨラムです。そのとき主に伺ったでしょうか。いいえ、伺っていない。主に伺いもせず、自分の考えで突き進んだ。それがこの結果ですところがいざ都合が悪くなると、自分の責任は柵に置いて全部神のせいにしてしまう。これはなにもヨラム一人の話ではなく、考えてみると私たちも同じようなことをしていたかも知れません。

2) 主の預言者はいないのですか

困難に直面したとき、ユダの王ヨシャファテは大事なことを忘れていたことに気がつきます。11節。「ヨシャファテは言った。『ここには、主のみこころを求めることができる主の預言者はいないのですか。』すると、イスラエルの王の家来の一人が答えた。『ここには、シャファテの子エリシャがいます。エリヤの手に水を注いだ者です。』」

列王記第一のとき、ヨシャファテは戦いに出る前に主の預言者を呼んで聞こうとしたのに、なぜか今回はそうしなかったようです。とにかく今でも遅くはない、主の預言者がいるならばその人に聞くべきだとヨシャファテは提案します。それに答えたのはヨラムではなく、彼の家来の一人であったとあります。これは何を意味するのでしょうか。

3) 主のことばが彼とともにあります

エリシャは北イスラエルの首都サマリア、つまりヨラムの地元にあります。ヨシャファテはユダの王ですから、おそらくエリシャのことを直接には知らなかったはずですが、それでもエリシャがエリヤの弟子であることを聞き、12節で「主のことばは彼とともにあります」と直感します。直接には面識がないヨシャファテでさえこう言っているのに、ヨラムは地元にいながらエリシャの「エ」の字も口にしようとしません。なぜでしょう。

3 道に迷うとき

1) 神に出会う前

私も含めてですが、みなさんも人生の途中でイエス・キリストに出会って初めて神を信じるというコースをたどってきたと思います。信仰を持つ前、大事なことを選択しなければならないようなとき、どうしてましたか。親とか信頼できる人に相談するのはまだ良いほうでしょう。周りの人が親切に「こうしたほうがいいよ」と言ってくれても、

結局最後は自分のやりたいようにやるのだと言って押し切っていく。私はそうでした。それで周りの人たちにどれほど迷惑をかけたか、思い出だけで恥ずかしくなる。自分の思い通りにやっとうまく行ったのならまだいいでしょう。実際はそうじゃない。この道を行ったらやがて困ったことが起きるよと言われたとおりになる。そこで初めて自分が間違った選択をしたと気がつき、右往左往する。その繰り返しでした。

2) 追い込まれて初めて方向転換する

ヨラムは、預言者エリシャの存在を知っていながら、エリシャに聞こうとせず、むしろ自分が考えた作戦にこだわりました。そうしたら必ずうまく行くとの自信があったということでしょう。それともう一つ、ヨラムがエリシャに聞こうとしなかった理由があります。最初に同盟を結んだときのことが頭にあったのではないか。あの日、ヨラムの父親であるアハブは、預言者ミカヤからあなたは戦いで倒れると言われて、そのとおりになった。そのことがヨラムの脳裏にあります。それでエリシャに聞くことを恐れたのではないか。それで自分の思うとおりに突っ走る。ところが七日目になって水がなくなり、部隊が全滅するかも知れないという危機に立たされたとき、どうしても方向転換しなければならぬことに気がつき、しぶしぶエリシャのところに行くことにする。

3) いつでも神とともに再出発できる

ヨラムの姿からいろいろなことをふりかえさせられます。自分の考えで突き進み、ある日壁にぶつかってしまうことがあります。そのときどうするか。大きく分けて二つタイプが考えられる。一つ目、絶対に自分の非を認めず、失敗の責任をあの人の人、しまいには神になすりつける、典型的な罪人タイプです。もう一つは現実から逃げずに、自分の罪を認め、悔い改めて神に立ち返るタイプ。どちらがよいかは、言うまでもないでしょう。

しかしここで疑問が起こる。仮に自分が間違っていましたと認めても、すでに手遅れということがあるのではないか。取り返しがつかないことだって沢山ある。どうやったら問題が解決するのか。それが分かったら何も悩まない。

そんな人は今日の箇所を読んでください。ヨラムはもうて手遅れ、取り返しができないと絶望して嘆きました。では、そこですべて終わったのでしょうか。ヨラムが嘆いているとき、そばにいたのはヨシャファテが、「主の預言者はいないので

すか」と言ったこのひとことで、真っ暗闇だったところに光が与えられます。この後どうなっていくかはまた次回見ることになりますが、結論から言えば、ヨラムが思ってもいなかった方向に展開していきます。

長い人生の中で、もうだめだと絶望することがあります。皆さんの中にはそのような方もおられるかも知れない。気落ちするとき、私たちの視野は本当に狭くなっていて何も見えない。ところが神はそばに助ける人を送ってくださり、主のことばを聞いてみましょうと言って、まったく新しい視点を与えてくれる。主が語ってくださるみことばに従おうと決心するなら、主とともに再出発ができます。主は死からよみがえられたのですかた、手遅れとか、もう遅すぎるということはありません。主の目には、決心した日こそがちょうど良い日なのです。そのような主を信頼して歩んでまいります。